

日本山岳会への提言

大学山岳部に支えられた
日本山岳会と今後

宮崎紘一

高齢化が叫ばれて久しい日本山岳会であるが、100年の歴史ある山岳会を支えてきたのは、大学山岳部出身の若い人たちであった。現在の大学山岳部の窮状を考察するとともに、いかなる方策が考えられるかを東京農大O Bの宮崎紘一氏に綴ってもらった。

創立100周年記念事業を終え、未来に向けて新しいスタートを切った日本山岳会にとつて、課題のひとつに次世代を担ってゆく人たちの育成がある。現在の山岳会があるのは大学山岳部出身の人たちの功績が大きい。未来を託すべく大学山岳部と日本山岳会学生部

の現状を、私の関わってきた経験の範囲内で記して大学山岳部を少しでも理解していただければと思ひ、大学山岳部と日本山岳会学生部についてまとめしてみた。

大学山岳部の衰退が話題となつて久しい。この間多くの山岳部関係者が退潮に歯止めをかけるべく

努力を重ねてきたが、一向に改善されず結果はご存知のとおりである。原因についていろいろといわれているが、抜本的な解決策の見出せないまま今日に至っている。多くの大学山岳部で部員の確保ができず廃部となつてしまい、日本山岳会に団体加入していた大学山岳部も消滅、会から除籍される山岳部が後を絶たない。この状態は

一時的な衰退とは言いがたく、隆盛を誇り登山界の牽引車であつたかつての大学山岳部も、大学のおかれていた状況の変化に伴ひ、往時の山岳部のままでは存在し得ない時期に來ていると言えよう。

社会状況や若者の登山への関心の低下が山岳部員減少の原因であろうが、登山状況の変革も見逃せない要素だと思われる。インター

ネットに代表される情報の氾濫、交通網の発達、登山道や山小屋等の整備、登山用具の進歩などが、本来、若者の心を揺さぶる山の魅力を減じさせているのではないかと。さらに登山界のレベルの上昇は著しく、国際的に注目される登山のレベルに到達するには、今話題の特待生制度(問題もあるようだが)でもないかぎり難しく、大学山岳部が目標を見失つて低迷する要因のひとつとなつている。

大学生の置かれている状況は厳しく、授業を長期間はなれての登山活動が行ないくなくなり、部員の登山可能な日数も極端に少なくなつて、往時の30〜40日間などという積雪期合宿は望むべくもない。ひとつの3Kといわれ敬遠され

た時期と状況は変化してきて、親の反対により入部を断念するといふ学生は少なくなっているように思われるが、少子化による影響は受けていると思われる。

とはいえ山登りの奥は深く、国内の山でも、時間がなくても魅力的な登山は考えられると思うが、その域に達するまでの入口の部分で、今の高校生たちの登山経験の浅さが大きく影響していると思う。

私の関わってきた東京農業大学山岳部の実情を例にとつて考えてみよう。1980年代に、部員の



5月の八海山で、雪上訓練する山岳部員

減少に苦勞する状況が始まり、すでに20年続いていることになる。その間には4年生部員が卒業すると部員がいなくなり、廃部に追い込まれる危機的状況の時期もあり、幸いその部員が留年したことにより救われたこともあった。当時の監督が苦肉の策で、部員確保の方策としてカヌーによる川下りなど山登り以外のアウトドア活動を取り入れたこともある。また女子部員を積極的に勧誘したりして部員を確保する一方で、監督自ら合宿に参加し、部室には毎日顔をだし、トレーニングに精を出し、部員以上の活動をしてきたこともあった。

しかし、簡単には山岳部員が増えることはなく、不安定な状況は改善できなかつたが、部活動を支えるかたわら、若手OBを海外登山の計画に誘い出し実行していた。

1986年、中国崑崙山脈の7167峰の初登頂をきっかけとして、次々に海外登山を経験するOBが現われ、農大山岳部単独で8000峰登頂を目標にできるようになった。若手OBの活動に引張られるようにOB会もまるとまり、山岳部も落ち着きを取り戻

し、少しづつではあるが部員が定着していった。

少人数の部員を助ける意味もあって、海外の高所登山を経験した若手OBが年間を通じて全合宿に参加し、山岳部員と行動をともにすることで部のレベル低下を阻止することもできた。山岳部の学生たちが先輩たちと山行をともにすることで、登山の目標を具体的に持つことができたと、山岳部の活性化に大いに役立った。こうして少ない入部者を部につけてから海外の高所登山を経験し、山岳部の学生たちを指導するという循環ができていった。

入部希望の学生が少ないときは、部員を大切にすまあまり指導する側が臆病になりがちである。しかし、若手コーチを交えたよい意味での上下関係と、妥協しない指導で次々と合宿をこなしてゆく積極策がよい結果を生むという信念の



1986年、農大山岳部が初登頂した崑崙山脈最高峰、7167峰で

もとで、山岳部・OB会の運営を続けて成果を残してきた。

だが、遅まきながら社会状況の変化は若手OBにも厳しくなり、海外登山の経験を積む機会はおろか自分の志す国内の山登りも思うようにできないOBがほとんどになつてきている。合宿に参加する時間的余裕のあるコーチがいなくなると、コーチが関わるることによつてできあがった山岳部の循環が

崩れてくると思われる。刻々と変化してゆく山岳部のおかれている状況にどう対応していくかが、私たちの山岳部に課せられた課題であろう。これまで数度の大きな遭難事故を経験し貴重な人材を失いながら続けてこられたのは、大学当局の理解と農大の家族的な学園環境と山岳部OB達の情熱の賜物であった。だから、新しい問題も解決策を見出し出しているものと信じている。山は、同世代の青年たちが文字どおり寝食を共にしながら頭脳と身体能力の限りを尽くして目標に向かっていける数少ない場なのだから……。

現在の日本山岳会では、団体会員となつている大学山岳部を中心に東京近郊の山岳部で構成される学生部をおき、その学生部をバックアップする形で学生部指導委員会を設けて山岳部どうしの交流や情報の交換の場としている。学生部は定期的に会合を開き、先輩の登山情報やそれぞれの部活動の情報交換をしながら、部員の少ない山岳部に協力して部員募集を助け合つたりしている。

学生部指導委員会が海外登山を

積極的に応援しており、複数の大学山岳部部員が海外の山に合同チームを作り、登山を続けている。

メンバー全員が現役の山岳部員で挑んだ、1998年、ブータン「5725峰」以来、2004年、ネパール・ムスタンのチブヒマール、2006年、ネパール・マナスル山群のパンバリ・ヒマールと、「未知の地域の未踏峰へ」というコンセプトの登山を続けている。チブヒマールとパンバリ・ヒマールは初登山を果たしている。その間1999年には中国の学生たちと日中友好登山隊を組織し、雪宝頂に登頂した。以来、近隣国の中国・韓国の学生との交流も続けている。

これらの活動の基礎として、科学委員会が行なつたマッキンリーの気象観測隊に学生たちが参加し、海外の高所登山経験が後に続く一連の登山のきっかけになった。最初のブータン隊は、マッキンリー隊のメンバーが主軸になったが、次からは連続の参加者はなく大学も別な者がほとんどで、個人の経験の積み重ねではなく組織の経験の引き継ぎで実行されている。その意味では、学生部の仕組みが新しい伝統として定着しつつあると

思われる。

また、マラソン大会という名称で続いている皇居内堀通りを舞台として行なわれている長距離ランニング大会は、43回を重ねて続いている。多いときは参加人数が100名を越すときもあり、山岳部学生の数の認識を新たにすることもあるが、部員の人数が足りずチームで一緒になつたことをきっかけに合同チームを組織し、団体戦に参加するチームもあり、和気藹々のレースを展開している。この大会の魅力のひとつが、個人戦と団体戦の勝者はもちろん参加者に贈られる賞品で、役員の子生た



毎年、皇居で行なわれるマラソン大会の表彰式

ちがスポンサーにお願いし、その厚意で集められたものである。毎年、不慣れた学生たちが賞品集めに奔走しているが、礼を失した対応でしかられることもあるという。この大会の表彰に現在使われているカップは、大学山岳部のOBの親睦団体であるメトロ口会から贈られたものである。

今の問題は、大学を卒業し就職したほとんどの学生たちが日本山岳会と縁が切れてしまうことである。以前は若いOBたちが青年部に所属して山岳会を支える会員として育つていったのであるが、彼らを取り巻く環境が変わった現在でも彼らに頼つたままではよいのか考える必要がある。卒業後、次に山岳会に現われるのは会社を定年となった40年後というのではあまりにも寂しい。華々しい海外登山は無理でも、山登りとは縁の切れないOBも少なくないはずなので、同じ問題を抱えた仲間を探せる場としてでも日本山岳会を活用できないだろうか。チームをそんな集まりの場とすることができたらと、夢に描いているのだが、いかがなものだろうか――。